上田地域もの・こと交換制度
蚕都くらぶ

ま～ゆ

蚕都くらぶ・ま～ゆ会報 No.31 2006 年9月 10 日 発行

わたしたちの願い

蚕都くらぶ・ま～ゆという上田地域通貨モノコト交換制度は、地域で暮らすひとびとがお互いに助け合って楽しく暮らすための制度です。

私たちは、この地域の豊かな自然やひとびとの知恵・技術・経験・人柄を地域の宝と考えます。その宝を活用することで、より豊かな地域と人間関係を目指しています。

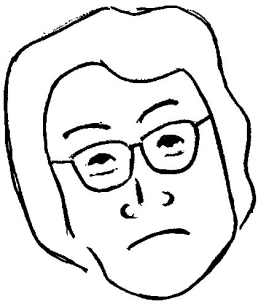
蚕都くらぶ・ま～ゆは、地域通貨を使って人と地域をつなぐシステムです。

- ❖ 人と人との新しい関係が生まれます。
- ❖ 自分の能力を再発見できます。
- ❖ 人が活き活きすることで、地域が元気になります。

ま～ゆ寺子屋

“沖縄戦跡を訪ねて”報告会に参加して思うこと。

№81　木下ハル子



沖縄戦跡を丁寧に訪ね、沢山の思いを持ち帰られた高須さん・宮崎さんの報告会に参加しました。
パワーポイントでの説明はとてもわかりやすく引き込まれました。
高須さんからは”平和”に対する熱く溢れる若い思いをひしひしと感じ、宮崎さんからは戦後 61 年、毎日の暮らしにこの事実をどう生かせることができるのか、という問いかけだったかと受け止めました。大変に重い課題です。
戦火のなかで生きた人、平和を享受できる今に生活している私達。
今だから言えることはたくさんあるけれど、到底理解できる範疇では無いことを、まず肝に銘じます。
国のために戦うことが”正義”とした流れの中で、極限状態に置かれながらも皆”生きる”事を信じていたはず。
全滅したガマ(洞窟)。生き延びることの出来たガマ、それは紙一重の運命の大きな別れであり、判断した指導者を責める事は出来ない。”情報といえるものは皆無に等しい状況下にあって、どう動けば良かったのか、その心中は察するにあまりある。″

敗戦、混乱ドサクサからひたすらの努力、頑張りで迎えたバブル、しかし崩壊も早かった。
いい思いを体験したあとの厳しい生活は、人の心まで荒れさせてしまった。
ほんとはじっくり生きることの意味を考えるいい時期であるのに、そのことは何故か後回しになり“不安、イライラ、心もとなさ、根拠のない強気”などが世の中を殺伐とさせてしまっている。

私個人の思いとして、２つ問題提起したい。
１、戦争、戦後をきちんと総括して教育の場で教えて来なかったこと。
２、あまりに悲惨な負け戦の為なのか、戦争の怖さ現実を体験者が語ろうとしなかったこと。

日本が、日本人が、あまりに安易な生活にどっぷり浸かってしまい、日々の暮らし、生活は有るけれど”生きる”事に留意出来ない現状に追い込んだ原因の一つであろう。と、
良く生きるということをもう一度考えてみよう。
終戦記念日、靖国参拝と、この時期毎度毎度のメディアの結論のない垂れ流しとも言いたい取り上げ。
戦後６１年はまだ戦後なのか？曲りなりにも戦のない 61 年間で有ったことはどう捉えるのか？
自分で自分を作り上げて行って、始めて自己管理、自律が可能となる。
自由にものが言え、自由に行動できる今の暮らしは逆に自己責任がついてまわる為、臆病になったり困ったことから目をそらせたりする現象を生む。
基本的には、人間社会の一員として守るべきルールの存在をしっかり認識することだろう。
そうであれば人と人が支えあえ、つながり、広がって、自らの力の結集で暮らし易い生活、住民の自治と進むことになるはず。
ま～ゆの精神も、この辺にポイントありと考えています。
過去の事実はしっかり受け止め、真の平和、=生きることを改めて考えた“ま～ゆ寺子屋、夏の夜の熱いひと時”でした。ありがとうございました。

吉 崎 酒 店　№126吉崎
●輸入元より直接仕入の厳選されたワイン
●和・洋酒各種・又健康に良いものいろいろ
●全商品５％まで「ま～ゆ」をお使い下さい
上田市中央3-7-7
TEL22-0300 Fax22-4525

都市・建築工房　№130ヒデさん(竹内秀夫)
●一級建築士事務所
●地元産木材を使ったローコスト環境住宅の設計料の５％まで「ま～ゆ」が使えます。
上田市御所274
TEL0268-28-7532
http://www6.ueda.ne.jp/~toshiken/

夏まつり＆ジャガパー

ま～ゆな人

№59 ひっちゃんこと古見 ひろ子さん

今回のま～ゆな人は、ほたるコンサートやま～ゆ夏まつりでお馴染みの(みなさんに歌唱指導をしていた)古見ひろこさんです。

古見さんの職業は、上田市内で音楽療法士を育てる学校で、音楽の基礎科目を教えている先生だそうです。同じま～ゆ会員の黒田敏子さんの妹さんです。どこか似ているところがあるか皆さんで想像してみてくださいね。

一番好きなことは、歌うことだそうです。歌が大好き！という理由から音楽の先生になったんだとか。ちなみに、今の学校では、若い学生が多いので、若者と一緒にいると「自分も若い!!」なんて感じているみたいですよ。

ほかには、旅行が好きだそうで、もしも時間にゆとりがあれば何時でも出かけたいそうです。

そのほかは、食べることです。料理が少し苦手な古見さん、「誰か、会員の方のなかで料理を作ってくれると嬉しいなぁ…、」なんて言ってましたよ。今年の夏は暑い日が続いていたので、冷やし中華やソーメンが食卓によく並んでいたみたいですよ。「毎日では家族が不満を言わないんですか？」と聞いたところ、家族も麺類が大好きで大丈夫みたいです。でも得意料理も(もちろん)あって、ギョーザはよく作るんだとか。

そんな古見さんの家庭では、旦那さんが家事を手伝ってくれるらしく、お互いに家事の分担をしているそうです。

古見さんのお宅は夫（ホーおじさんの弟さん）と娘さんが２人に息子さんが１人だそうで、息子さん以外はみんな音楽が好きだという芸術一家なんだそうです。一番下の娘さんはほたるコンサートに参加された方はご存知と思いますが、ここで電子ピアノを弾いていた女の子です。「息子にも音楽を好きになってほしいなぁ…」なんてことも言っていました。古見さんの願いなんですね。

古見さんの苦手なことはパソコンで、エクセルやワードは多少できるけど、インターネット等がちょっと…らしいです。でも本人は「パソコンを使っている時間があればテレビを見たり、うたた寝をしていたい」と言ってらっしゃいました。最近では、韓国のドラマにはまっていて、学校が休みの時は友達がビデオを貸してくれて、今年の夏休みでは３本も鑑賞したそうです。「韓国ドラマは、始まりがすごく華やかで楽しいけど、終わりがすごく暗く終わる」らしいです。でも、そんなところがまた面白くて見てしまうんだとか。

古見さんがま～ゆに入ってから、最初のうちは何かお願いしたくても頼みづらく、兄弟同士でま～ゆのやりとりをしていたそうです。最近では、顔の見える付き合いを重ねるごとに、声をかけやすくなり、段々楽しくなってきたんだとか。その他にも、ま～ゆの“自由意思”というのがすごく楽で重荷にならない、と言っていました。

これからも自分の得意分野で何か頼んでもらえるとすごく嬉しい、なんてことも…。お助け一覧表を見て、みんなで声をかけあっていきたい、とも言っていました。

最後に、ま～ゆの皆さんへ古見さんからのメッセージです。

「青空の下での飲み会や、ほたるコンサートがすごく楽しかったです。来年もみんなで歌って飲んで、楽しみましょう！」

トキ記

私からあなたへ

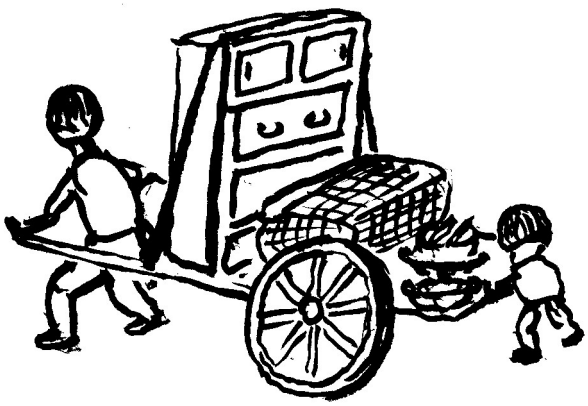
「物を捨てることに抵抗がある」

№29 三 井 幸 子

会報№23の“都々平･ミーすけのエコ²家族”を読んだとき、「私もそうだ」と思いました。前田さんほどきちんとしていませんが、「いつか必要になるかもしれない」と思い、しまってある物が沢山あります。すっきり暮らしたいと思う反面、捨てられない性格はどうしてできたのかたどってみました。

私は昭和18年上田市中之条で生まれました。その時、父は出征していましたので、母と叔母と子ども４人の暮らしです。夏の暑い日、お昼ごはんを食べようとしていた時、空襲警報が鳴りました。いつもは少し間があったそうですが、この日はB29の音が聞こえていました。叔母はすぐに防空壕に走りましたが、母は間に合わないと判断し、箪笥と壁の間に子どもたちを抱えて伏せました。バリバリバリーというもの凄いごう音と共に、家は壊れ、真っ暗な中でじっと消防の人たちがきてくれるのを待ちました。

隣には、東京から疎開して来た姉妹が住んでいましたが、一人は道の真ん中で、もう一人は家の入り口で亡くなっていたそうです。私の家族は全員無事でしたが、家財道具は全て壊れ、布団にも焼夷弾がたくさん刺さっていて、使い物になりません。



半分になった箪笥と、子どもたちを大八車に乗せて、母の生家のある青木村へ疎開しました。当時１歳半くらいですので、何も覚えていませんが、事あるごとに聞かされた戦争中の話は、辛い体験と苦しい生活の日々でした。

父が帰って来たとき３歳になっていましたが、初めて会ったので「おじちゃん」と呼んで後をついてまわったようです。

勤め先に近い天神町の市営住宅に引越しましたが、食べる物が足りなかったらしく、父は土曜日の夕方に青木村へ行き、田畑の手伝いをし、日曜日の夕方野菜を自転車に載せて帰ってきました

母も布を継ぎはぎしては洋服を縫ったり、着物を縫っていました。外出した帰りに、瀬戸物屋さんの店の外に並んでいる茶碗を、丁寧に繰り返し見ている姿が印象に残っています。

二年生の冬まで市営住宅にお世話になり、材木町へ引越しました。

こんな暮らしぶりなので、父も母も物をとても大切にしました。私と違うのは、“何処に何があるか”をきちんと判っていた事です。その点も見習いたいと思います。

最近「自衛のための戦争は仕方がない」という風潮もありますが、どんな戦争も絶対にしてはいけないと思います。

自分史

『下伊那郡三穂村―山村の少女―』

No. 158

上野　博子

この頃、『下伊那郡三穂村―山村の少女―』という小冊子を出しました。タイトルの地域は現在飯田市の最南端で天竜川西岸にあります。小学校教員の父がその村に転任し、私たち家族がそこで暮した四年間の自分史です。

それは昭和十八年年五月から二十二年三月まで、私の小学校六年から中学三年までになります。つまり前後に日本の敗戦を挟んだ頃です。

毎年八月になると十五日を中心に日本の「戦争と平和」の問題がマスコミに登場します。とりわけ今年はそれに「靖国神社」も加わって論戦を呼びました。

『下伊那郡三穂村』はそういう時代の、一人の少女の暮しを書いたものです。その中で「八月十五日」の天皇の放送で終戦を知った私は（「戦争を途中で止めるなどという終わり方があったのか。なんだ、そんな終わり方が出来たのか」と先ず思いました。先頭に立って本土決戦を叫び、私たちすべての国民に玉砕しか無いと言い聞かせたものに追求の気持を抱かせました）とあります。

（つい半月前には毎日、撃ち落した敵機の数、敵艦何隻に大損害という記事と「戦いはこれからだ」「皇国毅然たり」という文句で埋っていた新聞はその日を境に、自由と民主主義による日本の再建をうたいはじめました。）という時代で、日本人は長い戦争に疲れ切り、食糧不足も加わって大人も子供も生きるのに大変でした。

でも自我の形成期にこのような社会の混乱と価値の転換を体験できたことは貴重でした。自分の目で見、耳で聞いたことだけを信じようという基本的な生活姿勢が身に付きました。

堅固に見える国家というものも人びとがその気になれば一日で崩壊するものだという考えは、その後のベルリンの壁の破壊、ソヴィエト連邦の解体などで証明されました。

『下伊那郡三穂村』と同じ年頃の少女を見かけると、今は七十五歳にもなった私にはいたいたしいという感情が湧きます。もう十年にもなりますが「ガングロ」といって顔を黒褐色に塗りつぶした少女たちが現れました。「だっこちゃん」人形のような黒い顔の皮膚の下にもヒリヒリした傷つき易い心が見えるような気がしました。

でもこの頃、電車の中で化粧品一式を広げて余念の無い少女や駅前などの地べたに座って脚を投げ出し物を食べている少女を見ると、異星人みたいで少し怖い気がします。

（＊ご希望の方には『下伊那郡三穂村―山村の少女―』を一冊千ま～ゆでおわけ致します。）

わたしはスペシャリスト

秋の花

No.102

長谷川 貢

今から2万年以上前に生存していた旧人のネアンデルタール人の死者にも、花が供えられていたことからすると、花を賞(め)でることは現代人だけでなく古くから行われてきました。

花屋さんに行けば、今では世界中のどんな花も季節を問わず手に入りますが、このように花を楽しむようになったのは最近のことです。

四季の変化のある日本にはたくさんの花が咲きますが、太古から縄文時代までは日本の野山には、河原撫子(カワラナデシコ)、野菊(ノギク)、釣鐘人参(ツリガネニンジン)など今で言う野草の類が点在して咲いていました。

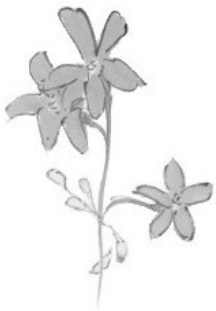
日本に国家が成立し、奈良時代に編纂された万葉集で一番多く歌われたのは、萩(ハギ)と薄(ススキ)です。萩(ハギ)は林の周辺に咲く花で、目立つ特徴があるわけではありません。切花にしてもすぐ花弁が散ってしまいます。

薄(ススキ)も花としては、いまいちの花です。これらの花が万葉人の話題になったのは、短期間のうちに奈良に都を造るため、まわり一円の樹木を根こそぎ伐ったために、その後の荒地を中心にたちまち萩(ハギ)と薄(ススキ)が都を覆いつくし、今まで都人のあまり目に入らなかった花が目に付くようになりました。つまり万葉の花とは、日本の最初の大規模な自然破壊の結果生まれた花でした。

平安朝から江戸時代になると、中国から入ってきた外来園芸種の花が主流に移ってきます。秋の代表的な花は何といっても菊です。日本に入ってきたときは小さな菊でしたが、改良に改良を重ねて、花色はもとより花の姿も、大輪、中輪さまざまに変化して来ました。

明治以来現在まで秋の花の代名詞はコスモスです。今では日本の秋の景色にすっかり溶け込んでしまったコスモスは、メキシコ原産でヨーロッパ軽由で明治の中頃日本に紹介され広がってゆきました。

黄花コスモスは、戦後アメリカで改良された花が日本に伝えられましたが一般に広がったのは最近のことです。



最後に付け加えなければならないのは紅葉です。今では赤い色が当たり前ですが、万葉の時代には黄葉を意味していましたが、大陸文化の影響で赤の文化に変化して赤い色の方が美しいと思われるようになり、庭木も赤く紅葉する樹が広がってきました。原生林の紅葉は、赤、黄色とりどりに紅葉するのが普通で、これが日本の古来の紅葉です。

外国ではカナダの赤く紅葉する楓(カエデ)並木は有名ですが、ベルリンでは黄葉する菩提樹(ボダイジュ)、パリでは黄茶に落葉するマロニエが知られています。ロシアでは晴れ渡った短い秋に、カラカラと音を立てて、黄金色に輝き風に舞う白樺(シラカバ)があります。日本の昔の歌人は秋の花はどこか淋しいといっていますが、全山錦繡(きんしゅう)に彩られて輝く紅葉を見て一体どこが淋しいというのでしょうか。

われらNPO ⑦

地域からの発信

遊び塾with you—with me（上田市）

子どもたちの心を解放

自然の中で楽しむ場提供

上田市真田町の「千古（せんこ）の滝」。滝つぼに入った秦健二さん（34）は子どもたちを次々と担ぎ上げ、水面に放り投げた。滝つぼから上がると、大きく肩で息をつく。「真剣勝負をしないと、子どもに見透かされますから」

秦さんが代表を務めるNPO法人「遊び塾」は二〇〇一年に活動を始めた。月一回、自然の中で遊ぶ場を提供し、上田小県地域の小学生を中心に毎回二十—三十人がやって来る。七月はジャガイモやトウモロコシを収穫、八月は滝で遊んだ。九月は菅平高原で秘密基地を作る予定だ。

〇二年度に導入された学校完全週五日制への対応や、放課後の児童対策により、地域の育成活動や学童保育などは充実してきた。ただこれらの対策は、働く大人の都合だったり、学校の延長だったりと、必ずしも子どもの視点が優先されていない例もある—と秦さんはみる。「安心して思い切り遊べる場って、意外に少ない」と話す。

塾のルールの一つが「けんかは一対一。二対一になったらやめる」。少しでも多数になると「いじめが始まるから」。秦さんが子どもたちに言い聞かせている約束だ。

秦さんは神奈川県川崎市出身。小学六年の時、学校でいじめに遭い、強迫症状で意思に反して声が出るようになった。孤立感を募らせ、症状が悪化。二十六歳の時、奇異の目で見る近所の人に対し、親が頭を下げているのを「見てしまった」。家にも居られず、住み込みの働き口を探して菅平高原に来た。

死ぬことも考えたという。「生き残った自分がやるべきこと」を考える中で見いだしたのが、子どもたちの心をほぐすNPO活動だった。

滝を登る子どもと「遊び塾」のスタッフ＝19日、上田市真田町「千古の滝」

上田市神川小三年の長井健実（けんみ）君（9）は昨年十月から参加。滝で遊んだ日、「学校の違う友達がどんどん増える。もう五十人以上」と胸を張った。

発達障害の子や、ひとり親の家庭で頑張っている子も来る。秦さんは「子どもは皆、学校や家庭で『いい子』でいようとストレスを抱えている」と指摘。遊んで心を解放し、そこで出会う友達、親でも教師でもない大人とのつながりを大事にしたいと思う。「学校や家庭以外に安心できる場所があっていい。安心を得た子はきっと、困っている子に『大丈夫、一緒だよ』と言えるようになる」と期待している。

遊び塾with you—with me
☎090・2207・7854
〒386—2202　上田市真田町本原19の1
遊び塾の参加者、ボランティアを募っている。

千曲市戸倉の老(?)夫婦の秦（はた）です。

昨年の秋頃、入会しました。県都長野市の市役所近くで食堂を二人で細々と２８年営んで来ました。サラリーマンの食事やら飲み会が主です。近年は若いお客様の趣向に老骨の感覚がついて行けず、苦悶の商いで少々くたびれてきておりました折り、ま～ゆの諸氏に出会いとても元気づけられました。

そこで、都々平さんの”ま～ゆは私の命です”が私の胸にじーんときまして感動しました。できればもっと行事に参加したいのですが、何分にも近年二人とも趣味が高じて…。

私は囲碁将棋クラブを開校。妻（ママ）は、つる細工、洋裁小物、フラワーアレンジメント等に凝りだし、長野の友人達やお客さんとの触れ合いをすぐさまぶっちぎる事もできかねておりますので、なかなか時間がとれません。前田さんご夫妻のようになるまであと一年間位時間をください。どうぞよろしくお願い申し上げます。

歩む道はそれぞれ異なっていても、想いは同じ人達の集い。仲間と呼んでいいのだろう。それぞれにたっぷり個性があって、味わい深い感覚をお持ちな皆さん。みごとなチームワークとすばらしい組織力。リーダー達のにこやかな応対ぶり。ただただ感心することばかりです。こんなすばらしいみなさんと知り合ってとても幸せな気分です。草餅も、お味噌もとてもおいしかったです…。さて、蚕都くらぶ・ま～ゆ30号。”いじこさんの記事”を拝読して頭をなぐられたような気がしました。なんと理路整然と地域通貨のあり様を明記しているのでしょう。と敬服しました… 。これからは、いかにこの理論と実践が溶け合うかでしょうね…。

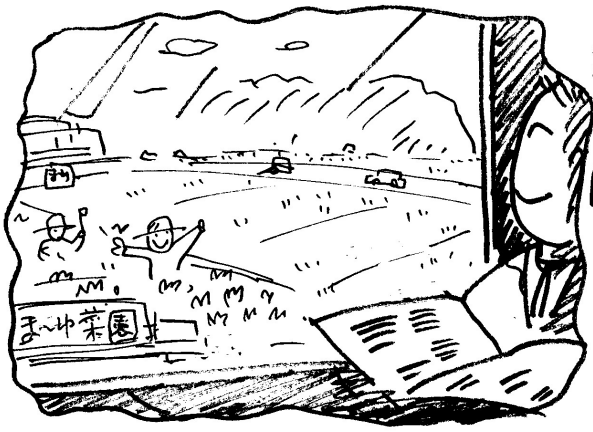
No.179秦 洋一・No.180秦チヨ子

座談会のテープ起こしをしてみて　（にゃんこ先生）

以前、対談(二人ともかなり早口でした)のテープ起こしをしたことが一回だけあります。話者が大勢いる座談会はもっとたいへんだろうなあと思っていましたが、基本的には一度に一人だけが話をする状況で、しかも会場の三ヶ所で録音していたこともあって、やりやすかったです。もっとも座談会にしては少々雰囲気が固かったかもしれません。

テープ起こしの作業は、「遅聴き再生」が出来るテープレコーダーがあるので、それで聴きながらパソコンに打ち込んでいきました。話された言葉を文字にするには、書かれてはいても書き言葉にはならないよう、基本的には聞こえるままに打っていきます。同時に、繰り返しを省いたり、文のねじれを正したりしますが、あまりに整え過ぎないようにも気を配ります。もちろんそういうことは意識せずに、自然にやっていくのですが。

取り上げられた四つのテーマを、今度はま～ゆ市で一回に一つずつ取り上げ、出された提案を一つ一つ検討して、この座談会を意義深いものにしていただきたいと思います。



いつでも どこでも ま～ゆ！

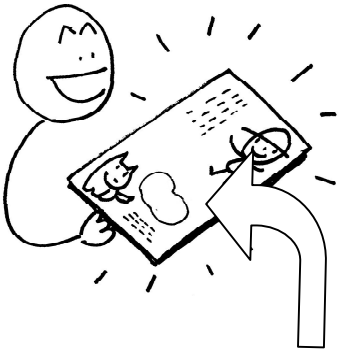
早朝のしなの鉄道で上田から長野へ向かう。何げなく景色を眺めると…ま～ゆ秋和菜園のところに人の姿が！元気な「ま～ゆ人」が野菜の収穫や手入れに楽しそう。わずか数秒間の車窓風景だったが、その日一日が何ともうれしかった。

どんな本になるのかな？ プロジェクトいよいよ大詰め！！

安井啓子

ま～ゆのこれまでを振り返り、これからを考えるきっかけにしたい、そしてま～ゆのことをもっと多くの人に知ってもらいたい（できれば日本中の人に　無謀？…）と始めたこのプロジェクトもいよいよ大詰めを迎えました。原稿もほぼ出揃い、だんだん形になってきています。

２月からスタートして８ヶ月余、編集作業は、夜遅くまでになったり、時には朝から夜までぶっとおしになった日（脳が沸騰して終わり頃には思考停止？の人も…）もありましたが、不思議と楽しく充実した時間でもありました。



こうした編集を通じて、ま～ゆ人が 日頃 何を考え、何を望んでいるのかが見えてきたように思います。いろいろな場面で、ま～ゆの人たちが生き生きと活躍している姿に、改めて「人こそ宝」を実感しています。

“手前味噌”的ま～ゆですが、ぜひ多くの人にこの本が届くと良いな・・と、仕上がりをわくわくして待っています。

ま～ゆ５周年の総会で皆さんにお披露目できる運びです。その節は自分の分はもちろん、友人、知人、親戚などの分もお買い求めくださるよう今からお願いです。

おっと、まだ本のタイトルが決まってない？ 何と大胆不敵！な・・・・。

さようなら、小池良子さん。

７月30日、会員番号101の小池良子さんが急逝されました。

昨年退職されるまで、31年間 原町の“綿良学園”で洋裁の講師を勤めてこられました。この間、諏訪形(保育園の隣)から徒歩で通われたという「体には自信がある」方で、「夫婦揃って医者いらずはいいけれど、いずれ何かがあったときには、相談に乗ってね」と“病気に縁の深い？”わたしにそんなことを言っておられましたが、突然襲った病魔に抗しきれず、82年の生涯を閉じてしまわれたのでした。

良子さんは入会後しばらくはま～ゆ市に顔を出されていましたが、ここ２年ほどは足が遠のいて、お馴染みの会員さんは少なかったと思います。ご主人の小池雅夫さんも“かくしゃく”という言葉がぴったりの心身ともに健康な方なので、庭の手入れや掃除等、全てご自身がなさっていて、うらやましいほど自立されていました。そのお二人も「いつまでもこれが続けばいいけれど…」の一抹の不安から「ま～ゆの皆さんにお世話になる時が来たらお願い」と“近くのま～ゆ”に期待をかけていらっしゃいました。

夫の雅夫先生が上田市史の編纂という大事業が完結し、良子さんは退職して自由な身になった今年に入り、「ま～ゆの人たちと顔見知りになろう」と考えて、春には味噌プロジェクトの豆の選別作業に参加されたばかりでした。端布で作った巾着袋を「皆さんにま～ゆでお分けしてね」と私に手渡され、４月のま～ゆ市では好評で、完売しました。

本当にこれからでした。仕事としての繊細な針捌きばかりではなく、いつ伺っても家の中も外もきちんと片付いて塵ひとつなく、食べるものもズクを惜しまない自然志向で、見事な生活を送っていらっしゃいました。健康の源がここにあることを現実の形で示されていて、教えていただきたいことばかりでした。いつか“ま～ゆな人”に登場をと思っていたのでしたが……残念です、無念です。

ご冥福をお祈りします。

No.50　前田光俊

5周年 総会と
ま～ゆまつり

１１月２３日（祝）

（予定に組み込んでおきましょう）

これから張り切って企画を立てます。

盛り上がるアイディアを募集中！。

ＭＬでお知らせします

10月ま～ゆ市
10月10日(火)
よる7時～
場所：中央公民館

秋のバスツアーは中京方面で人気の高い“香嵐渓と足助のまち”探索です。

- ⁂ とき　11月30日(日) 5時出発
- ⁂ 集合　寿限無前
- ⁂ 参加費　およそ 2,500円
- ⁂ 詳細は １０月のはがき通信で

編集を終わって

8 月があまりにも暑かったせいで、31 号は夏痩せしてスリムになりました。(苦しい言い訳)。しかし、骨も筋肉もしっかりしているのは読んでみればお分かりでしょう。夏負けではありません。

61 年前をテーマにした考えさせられる記事が目立ち、また、うんちくを傾けてくださった会員さん(脅迫されて書いたと苦情を言われた方もありましたが)のページを見て、さながら“ま～ゆ寺子屋瓦版”といった印象を私は受けました。「お楽しみのま～ゆだけでない」幅の広さと奥の深さを感じています。

いっぽう、小言っぽいことも申し上げます。それは、先号掲載のいじこさんからのキツーイご意見についてです。これといった反応がなかったのは何故でしょうか?。わずかに秦さんが感想を述べていますが、ま～ゆのこれからのためには、もっと自由に意見を交わすべきではないかと私は思います。

9月のま～ゆ市で、“座談会”の第2弾が予定されています。おいおいこれを重ねていって、ま～ゆがよりよく進んでいってほしいと願いますがいかがでしょうか。　都々平

七田チャイルドアカデミー上田教室　No.11竹田

●体験レッスンの20%まで「ま～ゆ」をお使い下さい

上田市中之条101-1利幸第2ビル201号
TEL23-2952

甲田はきもの店　No.39 甲田

●ご利用金額の 10%まで「ま～ゆ」をお使い下さい
●靴、草履、下駄などの修理は20%まで使えます

上田市中央4-6-24
TEL22-1272

街の気軽なマルチメディアショップ
㈲ 伸和印刷　No.57 中澤

●ご利用金額の 10%まで「ま～ゆ」をお使いください
●今、流行りの自分史を作ってみませんか?
●会議資料作りに便利な、製本機能付き
高速デジタルコピー機導入しました

上田市国分1-7-12
TEL22-7710 Fax22-7718

代表　安井啓子

ま～ゆ連絡先　前田光俊
〒386-0041
上田市秋和 503-6
TEL 27-1230

ホームページ　（検索エンジンで地域通貨 ま～ゆ を開いてください）